



赤谷の森から

○赤谷の森のモニタリング活動 第3回(ホンドテン)

私たちが生きていく21世紀は「環境の世紀」と言われ、「共生」がキーワードの一つとなっています。自然との共生、野生動物との共生・言葉は出てきますが、具体的に何をどうすればいいのでしょうか？

赤谷プロジェクトでは、動物の視点に立って森を見ることで、具体的な「何か」が見えてくるのではないかと考えました。

テンの視点で森を見る



センサーカメラに写ったホンドテン

テンは日本全国各地、海岸近くから奥山まで広く生息している身近な動物です。みなさんも名前ぐらいは聞いたことがあるのではないのでしょうか。

このテンは、何でも食べるのが特徴で、日本に暮らすほ乳類の中でもトップクラスの雑食性を誇ります。

こんなテンの食生活を調べることで、テンにとっての赤谷の森の環境やその変化を客観的に捉えることができるのではないかと考えました。ではどうやってテンの食生活を調べるのか？ テンは夜行性ですので、餌を捕っているところを直接観察することはできません。ですが、明るく目立つ場所に「フン」をすれば、その習性があります。そこに目をつけ、テンの落とし物(フン)を集め、それを調査・分析することになりました。

ホンドテンの調査



フンの調査

この調査の目的は、テンの生息数や生態を知ることではなく、テンの視点から赤谷の森の環境やその変化を見ることです。統一的方法で、定期的・継続的に長期間フンを採取することが大切になってきます。赤谷プロジェクトでは、現在、毎月4つのルートを一回ずつ調査(フンの採取)することになっていますが、この調査の担い手はサポーター

と呼ばれるボランティアのみなさんです。毎月第一土・日の「赤谷の日(サポーターの活動の日)」での調査に加え、サポーター有志で結成された「テンモニ隊」のみなさんが休日返上で頑張っています。平成17年度の予備調査から平成23年度までの7年間で採取されたフンは3750個となりました。

今まで分かったこと

これらのフンを分析したところ、赤谷の森に棲むテンは、九州や関西のテンに比べると、ネズミ類などのほ乳類を食べることが多いようです。また、植物類ではサルナシが飛び抜けて多く、その他ツルウメモドキなど数種類で植物類の90%を占めるといふかなり偏った食べ方をしています。このような傾向は北部日本の山地渓谷型にもよく見られます。

また、赤谷プロジェクトでは、平成16年と18年に小出俣林道沿いに人工林の伐採試験地を設けています。それらがテンに何らかの影響を与えているのではないかと考え、テンのフンの内容物の変化等に注目して調査を行いました。その関係はよく分かりませんでした。もっとも、伐採をしてすぐに草木が繁茂し実がなるわけではありませんので、タイムラグが生じているだけなのかもしれません。私たちがテンの視点に立てるのは、まだまだ先のことのようにです。

今、大切なことは、継続してデータを積み上げ、最初に立てた仮説に

こだわらず、様々な角度から検討を加え少しずつ前に進んでいくことだと考えています。

○「環境教育研修講座」が赤谷の森で行われました



現場研修

7月26日に群馬県総合教育センターが主催する「環境教育研修講座」が赤谷の森で行われました。

これは、先生方を対象に行われる研修で、主催者からは、赤谷プロジェクトで日頃行っているモニタリング活動を体験させていただきたいという要望があり、丸一日を赤谷の森で過ごすというプログラムになりました。

当日は、県内の小学校の先生を中心に13名の方が参加されました。自然林に戻すための伐採試験地、クマタカの観察(実際に見ることはできませんでした)、獣道を探し出しているセンサーカメラの設置など、赤谷プロジェクト漬けの一日となりました。

先生方のこのような体験が子供たちの環境教育の場に活かされることを期待しています。